

## 「結びとどめよしたがひのつま」について

藤河家 利 昭

## はじめに

よく知られている葵卷の生霊の歌、「なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま」は、宙に迷っている魂を鎮めてくれるように訴えたものと解釈されている。しかし、この歌を検討してみると、それだけでなく六条御息所が生霊になることによってしか伝えられない、源氏に対して一貫して求めていた心底の思いが示されていると考えられる。「長恨歌」等とも比べることによってその独自性を明らかにしたい。

## 一、「なげきわび」の歌の解釈

葵卷の、葵上に乗移った六条御息所の生霊が源氏に訴える場面を引用する。

あまりいたう泣きたまへば、心苦しき親たちの御事を思し、

またかく見たまふにつけて口惜しうおぼえたまふにやと思して、「何ごともいとかうな思し入れそ。さりともしけしうはおはせじ。いかなりともかならず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣、宮なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ」と慰めたまふに、「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」となつかしげに言ひて、

なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることと、聞きにくく思してのたまひ消つを、目に見す見す、世にはかかることこそはありけれど、疎ましうなり

ぬ。あな心憂と思されて、「かくのたまへど誰とこそ知らね。たしかにのたまへ」とのたまへば、ただそれなる御ありさまに、あさましとは世の常なり。人々近う参るもかたはらいたう思さる。

(2・三九、四〇)<sup>(注1)</sup>

この生霊の歌は次のように解されている。

嘆きわびたあまり、身から浮かれ出て空に迷っている私の魂をば、下前の棲を結んで、結び(繋ぎ)留めてくれよ(本心に帰してくれよ)。

(日本古典文学大系)

嘆きのあまりに身を抜け出て空にさまよっている私の魂を、下前の棲を結んでつなぎとめてください。

(新編日本古典文学全集)

「したがひのつま」は「人目忍んでのわが「夫つま」をひびかせた表現か。

(同頭注)

悲しみにたえかね、(身から抜け出して)宙に迷っている私の魂を結び止めて下さい。下前の棲を結んで。

(新潮日本古典集成)

悲嘆に堪えかね(身から抜け出て)空にさまよう私の魂を結びとどめてください。下前の棲をむすんで、の意。

(新日本古典文学大系)

物思いにたえかねて(身から離れ出て)空に迷っている私の魂を結びとどめてください。下前の棲(を結んで)

(源氏物語評釈第二卷)

嘆きわびてわが身を抜け出し空にさまよう私の魂を、下前の棲を結んで結びとどめて下さい、人目を忍ぶわが夫よ。

(源氏物語注釈三)

これらの解は多くが「したがひのつま」を結ぶのが誰なのか示していないが、源氏に言っていることからすれば、源氏に結んでほしいということになるのであろう。この中で注釈の「人目を忍ぶわが夫よ」と、源氏に言い掛けているように取り、評釈の「下前の棲(を結んで)」と、「したがひのつま」に言い掛けたように取る点が注意される。

古注では次のように解されている。

玉の出ぬるを結ひとむる事あれば也 結ひとめよとはうかる、心を本心にかへし給へとかこつ心にや<sup>(注2)</sup> 玉のいてぬるを結ひとむる事あれハ云也結と、めよとハうかる、心をなくさめ給への心にや<sup>(注3)</sup> 〔一葉抄〕

「うかる、心を本心にかへし給へとかこつ心にや」、「うかる、心をなくさめ給への心にや」のように解されているが、これもやはり源氏にそうしてほしいということであろう。

『源氏物語』の歌の中で、この歌のように「なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよ」とした上で、さらに「したがひのつま」を結んで、というふうに取りすることは可能なのであろうか。「ゝをゝせよ」という形の歌を上げてみると次のようである。

晴れぬ夜の月まつ里をおもひやれおなじ心にながめせずと

も (末摘花) (傍線筆者)

浦人のしほくむ袖にくらべみよ波路へだつる夜のころもを

(須磨)

うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれもしほたるてふ須磨の

浦にて (須磨)

風に散る紅葉はかろし春のいろを岩ねの松にかけてこそ見  
め (少女)

ふちに身を投げつべしやとこの春は花のあたりを立ちさら  
で見よ (胡蝶)

雪ふかきをしほの山にたつ雉のふるき跡をも今日はたづね  
よ (行幸)

とがむなよ忍びにしほる手もたゆみ今日あらはるる袖のし  
づくを (藤裏葉)

背く世のうしろめたくはざりがたきほだしをしひてかけな  
離れそ (若菜上)

あはれとて手をゆるせかし生死を君にまかするわが身とな  
らば (竹河)

かたがたにくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまどはば  
(総角)

これらは、動作の対象となるものは一つであり、二つになるこ  
とはない。また歌の中では誰に対して命じているのか示されて  
いないが、いずれも贈答歌のどちらか、或は手紙または返事で

あり、相手に対して言い掛けていることは分かるのである。

八洲もる国つ御神もこころあらば飽かぬわかれのなかをこ  
とわれ (賢木)

行く方をながめもやらむこの秋はあふさか山を霧なへだて  
そ (賢木)

咲きてとく散るはうけれどゆく春は花の都を立ちかへりみ  
よ (須磨)

秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲ををかけれ時のまも見  
ん (明石)

君もさはあはれをかはせ人しれずわが身にしむる秋の夕風  
(薄雲)

こころから春待つ苑はわがやどの紅葉を風のつてにだに見  
よ (少女)

今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな  
(真木柱)

世をわかれ入りなむ道はおくるともおなじところを君もた  
づねよ (横笛)

これらも動作の対象となるものは一つである。またこれらは動  
作の主となるものも歌の中に示されている。

同じく「くをくせよ」という形で、「なげきわび」の歌の、  
「しがひのつま」のように五句が体言で終わる形のものとして  
は次のような例がある。

秋はててさびしさまざる木のもとを吹きなすぐしそ峰の松

風 (総角)

これは「峰の松風」に対して言い掛けたものである。「ゝをゝせよ」という形ではないが、それに準じると考えられる例がある。

山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露

(帚木)

これは「あはれはかけよ」としてあるので、基本的には「ゝをゝせよ」の形と見ることが出来る。したがってこの歌は情けの露をかけて下さいというように取るべきではなく、「情をかけてくれ、撫子の露よ」と取るべきであろう。<sup>(注4)</sup> 女は、直接に頭の中將に情けをかけてくれとは言いいにくかったと考えられる。内氣であるとともに、北の方の圧迫を受けて身を隠しているのである。そこで撫子の花に付けて、「撫子の露」に向かつて「あはれはかけよ」と訴える形で、暗に「撫子(幼き者)」に「露(情け)」をかける立場にある頭の中將の愛情を求めていると考えられる。

その他、次のような例がある。

おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松  
虫 (賢木)

これも「鳴く音な添へそ」とあり、基本は「ゝをゝせよ」の形とみなし得る。「野辺の松虫」に言い掛けているのである。

うぐひすのねぐらの枝もなびくまでなほ吹きとほせ夜はの

笛竹 (梅枝)

折りて見ばいとどにはひもまざるやとすこし色めけ梅のは

つ花 (竹河)

をちこちの汀に波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の川風

(椎本)

初めの「うぐひすの」の歌は、夕霧に対して言ったと取られて  
いるが、「夜はの笛竹」に直接言い掛けたとも取ることが出来る。  
後の二首は、それぞれ「梅のはつ花」、「宇治の川風」に言い掛  
けているのである。

おなじ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかり  
も (藤袴)

大空をかよふまほろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづね  
よ (幻)

かきつめて見るもかひなしもしほ草おなじ雲ゐの煙とをな  
れ (幻)

心ありて池のみぎはに落つる花あわとなりてもわが方に寄  
れ (竹河)

秋の野のつゆわけきたる狩衣むぐらしげれるやどにかこつ  
な (手習)

これらは倒置された形のものもあるが、呼びかける対象が基本  
的には最初に来ているものである。

このように「なげきわび」の歌でも、「結びとどめよ」という

動作の対象となるものは、「なげきわび空に乱るるわが魂を」だけであり、「したがひのつま」は、源氏に対してではなく、直接には「したがひのつま」に言い掛けたと見ることができる。生霊は源氏に調伏をしばらく休めてくれと言おうとしたのである。またここに来るつもりは全くなかったが、魂がひとりでに身から抜け出たのだと言っている。したがって、生霊の言うことであって御息所とは一応離れているとは言っても、日頃の源氏にうちとけない御息所の態度からしても直接源氏に着物の下前を結んで魂を鎮めてほしいと訴える状況にはないと考えられる。なお魂を鎮める呪文の歌として諸注に引かれる、「魂は見つ主は誰とも知らねども結びとどめよしがひのつま」も、「したがひのつま」に呼び掛けたと取ることができる。

## 二、「したがひのつま」

この生霊の歌については、諸注に次の『伊勢物語』の歌が引かれ、同じ発想であると言われている。<sup>(注5)</sup>

昔、男、みそかに通ふ女、ありけり。それがもとより、「こよひ、夢になん見えたまひつる」と言へりければ、男、

思ひあまり出でにし魂のあるならん夜深く見えば魂結びせよ<sup>(注6)</sup>  
(百十段)

魂が身から抜け出たであろうこと、それを結んでほしいとして

いることは同様である。しかしこの場合は、男が「魂結びせよ」と頼んでいる相手は女であり、男は、魂が「夜深く」見えた時に「魂結び」をして貰うことで、結果として「みそかに通ふ」ことがそういう方法で達せられると考えたのであろう。男には女がその「魂結び」をしてくれるであろうと期待し得る関係にあると考えられる。

柏木巻にも魂を結びとどめてくれと言う例がある。<sup>(注7)</sup>

「(略) 深き過ちもなきに、見あはせてまつりし夕のほどより、やがてかき乱り、まどひそめにし魂の、身にも還らずなりにしを、かの院の内にあくがれ歩かば、結びとどめたまへよ」など、いと弱げに、殻のやうなるさまして泣きみ笑ひみ語らひたまふ。<sup>(4・二九五)</sup>

『河海抄』は、「恋侘<sup>(注8)</sup>てよるま<sup>不本 よるま</sup>とふわか玉はなかなか身にもかへらざりけり」の歌を上げる。柏木は、源氏と目を見合わせたことによってそのまま気分が悪くなり、「まどひそめにし魂」が身に帰らなくなった。その結果として女三宮のいる六条院の内に宮を求めてさまようことがあるかも知れないので、柏木を女三宮に手引きした小侍従に結び留めてくれと言っている。これは物思いのためではなく、気分が悪くなって魂が迷い始めたと言ふ点が特異である。

生霊は、葵上と思つて慰める源氏に対して、物思ふゆえに魂が抜け出てここまで来たこと、そして歌で、暗に嘆きのあまり

身から抜け出て空に乱れている自分の魂を結び留めてほしいと訴える。これは、源氏の言葉の、夫婦は死後においても巡り合う縁があること、また親子であつても深い因縁のある仲は生々世々絶えることはないのでもた逢うことができると言ったことに答えたものである。そうすると、夫婦や親子の死後における再会に対して、「目に見す見す、世にはかかることこそはありけれと、疎ましうなりぬ」と、この世における生霊との対面ということが対応させられていると見ることが出来る。源氏が深い因縁によって一旦は別れても必ず世を隔てて再会できるとしているのに対して、生霊は、あくまでこの世において、魂結びによって魂が本の身に帰ることを求めているのである。

この歌の「したがひのつま」には「人目忍んでのわが「夫つま」をひびかせた表現か」(新全集) という指摘もあるように、「棲」に「夫(つま)」が掛けてあると考えられる。

『蜻蛉日記』下巻にも、「(したがひの)つま」に「夫」をかけた例がある。

今日、かかる雨にも障らで、おなじところなる人、ものへ詣でつ。障ることもなきにと思ひて出でたれば、ある者、「女神には、衣縫ひて奉るこそよかなれ。さしたまへ」と寄りきてささめけば、「いでこころみむかし」とて、縑の雛衣、三つ縫ひたり。したがひどもに、かうぞ書きたりけるは、いかなる心ばへにかありけむ、神ぞ知るらむかし。

しろたへの衣は神にゆづりてむへだてぬ仲にかへしなすべく

また、

唐衣なれにしつまをうちかへしわがしたがひになすよしもがな<sup>(注9)</sup> (傍線筆者)

作者は人から言われて、神に「へだてぬ仲」に返すように願った上で、夫が自分の意のままになるようにと望んでいる。ここでは「つま(夫)」との関係修復を願っているのであるが、御息所の場合は、源氏を「つま(夫)」と呼ぶまでには至っていないのである。

葵巻の初めには、源氏と六条御息所との関係が次のように語り起こされる。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫宮、斎宮にゐたまひにしかば、大將の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。院にも、かかることなむと聞きしめして、「故宮のいとやむごとなく思しめかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるがいとはしきこと、斎宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御気色あしければ、わが御心地に

もげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。  
 「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもて  
 なして、女の恨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしか  
 らぬ心のおほけなさを聞こしめしつけたらむ時と恐ろしけ  
 れば、かしこまりてまかだたまひぬ。

また、かく院にも聞こしめしのたまはするに、人の御名も  
 わがためも、すぎがましういとほしきに、いとどやむごと  
 なく心苦しき筋には思ひきこえたまへど、まだあらはれて  
 はわざともてなしきこえたまはず。女も、似げなき御年の  
 ほどを恥づかしう思して心とけたまはぬ気色なれば、それ  
 につつまたるさまにもてなして、院に聞こしめし入れ、世  
 の中の人も知らぬなくなりたるを、深うしもあらぬ御心  
 のほどを、いみじう思し嘆きけり。

(二八) (傍線筆者)

御息所は、源氏の自分に対する心を、「いと頼もしげなき」とし、  
 娘の斎宮と共に伊勢に下向しようかと思っている。またそれと  
 首尾対応する形で、源氏とのことが桐壺院を始め、世間周知の  
 ことになっているので、源氏の「深うしもあらぬ御心のほど」  
 を非常に気に病んで嘆いている。桐壺院は、源氏が御息所を  
 軽々しく並の女性と同じ扱いをしていることを諷めている。ま  
 た源氏は、御息所を公には妻として扱っていない。御息所の嘆  
 きは、結局源氏の薄情とともに妻としての処遇が公然となされ  
 ていないことに帰結する。そこには桐壺院が言うように、前春

宮が御息所を寵愛していたこと、帝が斎宮を我が御子と同列に  
 思っていることがあり、御息所にもその自負はあると考えられ  
 る。源氏もまた世間の評判が立つにつけ、大切にいたわしい方  
 と思つてはいるのである。要は御息所の身分にふさわしい処遇  
 が得られていないことに帰結する。

これは夕顔の巻の御息所の物思いとは様相を異にしている。  
 六条わたりも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえた  
 まひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。されど、  
 よそなりし御ころまどひのやうに、あながちなることは  
 なきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものを  
 あまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齢のほども似  
 げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの  
 寝ざめ寝ざめ、思ししをるることいとさまざまなり。

(一・一四七)

ここでは、御息所が思い詰める性質で、年が合わないこと、人  
 が耳にするであろうことの上に、源氏の夜離れによつて寝覚め  
 をし物思いにしおれていたのである。

車の所争いは、先のような源氏との関係を痛切に思い知らせ  
 ることになる。

ものも見で帰らんとしたまへど、通り出でん隙もなきに、  
 「事なりぬ」と言へば、さすがにつらき人の御前渡りの待た  
 るるも心弱しや、笹の隈にだにあらねばや、つれなく過ぎ

たまふにつけても、なかなか御心づくしなり。げに、常よりも好みとのへたる車どもの、我も我もと乗りこはれたる下簾の隙間どもも、ほほ笑みつつ後目にとどめたまふもあり。大殿のはしるければ、まめだちて渡りたまふ。御供の人々うちかしこまり心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさまこよなう思さる。

影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいと  
ど知らるる

と、涙のこぼるるを人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御さま容貌のいとしう出でばえを見ざらましかばと思さる。

(二三〜四)

御息所は、車争い自体で受けた屈辱はさることながら、源氏の「御前渡り」に目も留められなかったことにかえって心も尽き果てる思いである。特に葵上に対する扱いが格別であることに全く無視されたわが身と思う。「笹の隈」にも及ばない自分の立場に立って、歌では、姿を見ているだけで足も止めない源氏の冷淡さによって身の情けなさが一層思い知られるとしている。車争いの事件も、結局は源氏から受ける扱いによってわが身の不幸を思うのである。

葵上が物の怪にわずらう直前の、御息所の心の状態は次のようである。

御息所は、ものを思し乱ること年ごろよりも多く添ひに

けり。つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんことと思す。さりとして立ちとまらべく思しなるには、かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるも安からず、釣する海人のうけなれや、と起き臥し思しわづらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、なやましうしたまふ。大將殿には、下りたまはむことを、もて離れて、あるまじきことなども妨げきこえたまはず、「数ならぬ身を見まうく思し棄てむもことわりなれど、今は、なほいふかなきにても、御覧じはてむや浅からぬにはあらん」と聞こえかかづらひたまへば、定めかねたまへる御心もや慰むと立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく思し入れたり。

(三〇〜二)

御息所は、源氏を「つらき方」としながらも伊勢下向に思い切れない、また京に留まるには皆からこの上なく見下されたことが心穏やかではない。この二つの間を思い悩む御息所の心地は魂が抜け出す前段階にあると言えるが、この二つは源氏の薄情とその結果としての御息所の不本意な立場ということであり、表裏の関係にある。また「御禊河の荒かりし瀬」は、先の「影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる」の歌を受けていると見られるので、車争いでひどい目に遭っただけではなく、そのことによって源氏との関係における自分の



立場を思い知らされたことを言っている。<sup>(注10)</sup>このような御息所の心の状態が物の怪になる要因になったと考えられる。

そして、物の怪に取り憑かれた葵の上の様子が描かれた後、源氏が御息所を訪問する場面では、御息所の源氏との関係に対する思いが次のように述べられている。

うちとけぬ朝ばらけに出でたまふ御さまのをかしきにも、  
なほふり離れなむことは思し返さる。やむごとなき方に、  
いとど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、ひと  
つ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつ  
つあらむも心のみ尽きぬべきこと、なかなかもの思ひのお  
どろかさるる心地したまふに、御文ばかりぞ暮つ方ある。

(三四)

ここでも源氏への思いが断ちがたいこと、その一方で葵上の懷妊によって源氏がそちらに落ち着くであろうこと、そのため自分はずっと源氏を待っていることになるのも心が尽きる物思いをすることになる。即ち妻としての扱いを受けることは一層遠のくことになる。これに続いて御息所の、「袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき」という源氏と関係を持ってしまった自らを辛く思う歌と源氏の返しの歌があつて、そのすぐ後に御息所は葵上を襲う夢を見る場面が続いている。

このように御息所には、源氏の薄情と自分が公然とした妻の

立場に置かれていないという嘆きがあつたが、その気持を直接源氏に訴えようとは考えていない。物の怪が源氏のもとへ来たのは、調伏を緩めるように言うためであつて、御息所の意志とは関わりがない。あくまで御息所からは離れて生霊独自の働きをしているのである。しかし、このような御息所の嘆きは生霊の言つたことと繋がっていると見られる。

### 三、生霊の二面

次に葵上と思しき姫君を襲うことを夢に見る場面を見ておきたい。

大殿には、御物の怪いたう起こりていみじうわづらひたまふ。この御生霊、故父大臣の御霊など言ふものありと聞きたまふにつけて、思しつづければ、身ひとつの憂き嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなけれど、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむと思し知るることもあり。年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれどかうしも碎けぬを、はかなきことの折に、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまなりし御禊の後、一ふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君と思しき人のいときよらにてある所に行きて、とかくひきまさぐり、現にも似ず、猛くい

きひたぶる心出で来て、うちかなぐるなど見えたまふこと  
 度重なりにつけり。あな心憂や、げに身を棄ててや往にけむ  
 と、うつし心ならずおぼえたまふ折々もあれば、さならぬ  
 ことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出で  
 ぬ世なれば、ましてこれはいとよ言ひなしつべきたより  
 なりと思すに、いと名立たしう、ひたすら世に亡くなりて  
 後に恨み残すは世の常のことなり、それだに人の上にては、  
 罪深うゆゆしきを、現のわが身ながらさる疎ましきことを  
 言ひつけらるる、宿世のうきこと、すべてつれなき人にい  
 かで心もかけきこえじ、と思し返せど、「思ふもものを」な  
 り。

(三五七七)

御息所には「身ひとつの憂き嘆き」があり、「もの思ひにあくが  
 るなる魂は、さもやあらむと思し知らるることもあり」と、生  
 霊になったかも知れないのは、源氏への「もの思ひ」の故と考  
 えている。<sup>(注11)</sup> また物の怪になったことを世間が評判にすることを  
 思つて、「すべてつれなき人にいかで心もかけきこえじ」と、こ  
 のような事態になったそもその原因を「つれなき人」、源氏に  
 心のかけたこととしていのである。「もの思ひにあくがるなる  
 魂」といふ言ひ方は、先の生霊が源氏に言つたのと同様である。  
 御息所が葵上と思しき姫君を襲う夢を見るようになったのは、  
 車争いの折に、葵上が自分を無視し存在を認めない扱いをした  
 ことによって、心が静まらなくなったからである。これは先の

源氏の葵上に対する態度によつて屈辱を受けた、「おし消たれた  
 るありさまこよなう思さる」にも通じるものである。御息所に  
 は「人をあしかれなど思ふ心もなければ」とあるように、葵上  
 に危害を加える気持はない。御息所の意識と物の怪との間には  
 距離がある。しかし、車争いによつて「はかなかりし所の車争  
 ひに人の御心の動きにけるを」(三三)ということがあり、また物  
 の怪になったことを裏付けるように衣に芥子の香が染みこんで  
 いるのであり、御息所の葵上に対する悔しい思いには繋がつて  
 いると考えざるを得ない。この場面は、後の源氏に対して訴え  
 る場面においても、生霊が御息所の心に由来するものであつた  
 ことを裏付けることになるであらう。

このように葵上に憑いた御息所の生霊は、葵上を苦しめるこ  
 とと、源氏に相對することと二つの面が示されている。この二  
 つはいずれも源氏故の物思ひに由来するものである。そして、  
 それらは、葵上に憑いた物の怪を源氏が御息所と確認するとい  
 う意味で一連の展開を見せている。そうすると夢の中での「か  
 の姫君と思しき人のいときよらにてある所に行きて云々」は、  
 後の葵上に移つた生霊として実際に源氏に相對することに  
 繋がつていくと考えられる。その意味では葵上と思しき姫君を  
 襲う夢を見るといふことは、生霊となつて源氏に相對する場面  
 の前提になつていふことができる。逆に言えば、生霊は、  
 葵上に取りついた物の怪になることによつて初めて源氏と相對

することができたということになる。生霊としては源氏に相對することが究極の目的であつたと考えられるのである。

葵卷の初めには、源氏が御息所に対して公然と妻の扱いをしていないということがあつた。御息所はまだ「大将の君の御通ひ所」である。そのために車争いで全く存在を無視されるような目にも遭うのである。御息所は当初から源氏の愛情が深くないこと、また妻としての扱いを受けていないことを思い悩んでいる。このような御息所の心を受けて、生霊は直接には「したがつま」に対して自分の魂を結び留めてくれるように訴えながら、それをしてくれるのは「つま（夫）」である源氏しかないと思つてゐるのである。「したがひのつま」は、源氏に相對している訳であるから源氏が着ている衣ということになる。それは『伊勢物語』の男が女に頼んだのと似ている。

若菜下巻の、「髪を振りかけて泣くけはひ、ただ、昔、見たまひし物の怪のさまと見えたり」(4・二三五)と、葵上を取り殺した物の怪とそっくりという御息所の死霊出現場面でも、「わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれる君は君なり」(二三六)と、源氏の薄情さを恨むとともに、物の怪として現われるきつかけについて次のように語っている。

中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見たてまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらん、なほみづからつらしと思ひき

こえし心の執なむとまるものなりける。その中にも、生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いと恨めしく。今はただ亡きに思しゆるして、他人の言ひおとしめむをだに省き隠したまへとこそ思へ、とうち思ひしばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かくところせきなり。

(4・三三六七)

源氏と紫上との睦言の中に自分のことを悪く言われたことをその理由としているが、それを源氏が言うことによつて紫上よりも下に置いたことになるのである。<sup>(注13)</sup>

『夜の寝覚』の女一宮に物の怪が憑く場面は葵卷に基づいていると見られる。

また、北殿(寝覚の上)の御生霊、恐ろしげなる名のりするもの出で来て、「あはれ、今はかくてあるべきものと思ひ頼むに、あながちに忍びつつ、わざと持て出でたまはぬが、妬う、かしこき筋といひながら、内の御事の、あさまじううちすさびて、行くてのことにて、またとおぼし出でさせたまはぬ恥ちがましさを、『この御もてなしに、わざとがましくは、もて隠し、それに思ひ消ちてむ』と思ひしに、いとあさまじう、心憂きに、あくがれにし魂の來たるなり。さらに生けたてまつりたるまじ」など、言ひののしることを聞きたまふに、

(卷四・三八二―三八三)<sup>(注14)</sup>

寢覚の上の生霊は、「あながちに忍びつつ、わざと持て出でたまはぬ」、「この御もてなしだに、わざとがましくは」と言っているように、寢覚の上は内大臣にとって忍びの通い所であつて妻として公然とした扱いをしていないことや、特別な処遇をしていないことを恨んでいる。

#### 四、「長恨歌」・「長恨伝」と「離魂記」

このように源氏の愛情と、妻としての立場が確立することを求める生霊の思ひは御息所にも繋がっているのである。しかし、その思ひが源氏に受け止められることはない。御息所の見舞いの文に対する源氏の反応である。

常よりも優にも書いたまへるかな、とさすがに置きがたう見たまふものから、つれなの御とぶらひやと心憂し。さり  
とて、かき絶え音なうきこえざらむもいとほしく、人の御  
名の朽ちぬべきことを思し乱る。過ぎにし人は、とてもか  
くても、さるべきにこそはものしたまひけめ、何にさるこ  
とをさださだときざやかに見聞きけむと悔しきは、わが御  
心ながらなほえ思しなほすまじきなめりかし。(略)

とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞは  
かなき

かつは思し消ちてよかし。

(五一二)

源氏は、葵上の死をそういう定めとしながらも、御息所の生霊と対面したことを悔しく思い、御息所について考え直すことはできないようである。歌はこの世に執心を留めることを言っているのであるが、それは御息所が生霊となったことを言うのである。この源氏の返事を見た御息所は、「ほのめかしたまへる気色を心の鬼にしるく見たまひて、さればよと思すもいといみじ」(五二)と、源氏との仲が修復不可能と知るのである。

ところで、葵巻には「長恨歌」の詩句をふまえた源氏の歌がある。

「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所に、

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに  
また、「霜華白し」とある所に、

君なくて塵つもりぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬら  
む (六五)

「長恨歌」では、魂は夢の中にも現われない。それは仙界に魂を尋ねる前提となつていふと考えられる。それに対して源氏は、葵上の魂が床を離れたいものとしていふ。即ち、この世に執着を残して留まつているものとしていふ。生霊は、その対極として生きている人間の魂の執着を描いたものである。また死者と生者の違いはあるが、葵上の「亡き魂」が「あくがれがたき」と思つていふとすれば、御息所の「我が魂」が「あくがるる」としていふのと対照的である。しかし、いずれも源氏に執着し、

葵上の魂は落ち着き場所を得ていないことになり、生霊も魂が静まることができない点では同様である。このように「長恨歌」をふまえながらも葵巻は独自の変容を遂げている。<sup>(注15)</sup>

「長恨歌」では、道士は、「君王が展転の思ひを感じしが為に遂に方士をして慇懃に覓めしむ」と、玄宗の楊貴妃を思う心に感じてその魂を捜すことになる。それに対して貴妃の魂も、「但心をして金鈿の堅きに似たらしめば 天上人間会ず相見む」<sup>(注16)</sup>と応えている。幽冥境を異にしても心は結び合うのである。また陳鴻の「長恨伝」には次のようにある。

適々道士の蜀より来る有り。上皇の心の楊妃を念ふことは是の如くなるを知り、自ら言ふ、李少君の術有り、と。<sup>(略)</sup>上は肩に凭りて立ち、因つて天を仰ぎて牛女の事に感じ、密かに心に相誓ひ、願はくは世々夫婦と為らんことをと。言畢り、手を執りて各々嗚咽す。此れ独り君王之を知れるのみ、と。因つて自ら悲しみて曰く、此の一念に由りて、又此に居ることを得ず。復た下界に墮ち、且つ後縁を結ばん。或は天と為り、或は人と為るも、決ず再び相見て、好合すること旧の如くならん、と。<sup>(注17)</sup>

道士が術を使って楊貴妃の魂を蓬萊に捜し当てたのは、玄宗の楊貴妃を思う心の深さによるのである。また楊貴妃の魂もそれに応えて下界に墮ちて再び縁を結びたいと言っている。天にあつても人の世にあつても必ず逢つて元のように夫婦になろう

と言っている。

その他、魂が抜け出て男の許に行く話として「離魂記」がある。

宙は陰かに恨んで悲慟し、決別して船に上る。日暮、山郭の数里なるに至る。夜は方に半なるも、宙は寐ねられず。忽ち岸上に一人の行声甚だ速かなる有るを聞きしに、須臾にして船に到る。之を問へば、乃ち倩娘の徒行跣足して至りしなり。宙は驚喜発狂せんとし、手を執りて其の従来を問ふ。泣いて曰く、君の厚意此くの如きは、寢夢にも相感ず。今將に我が此の志を奪はれんとす。又君の深情の易らざるを知り、將に身を殺しても奉報せんとするを思ふ。是を以つて亡命して来奔す、と。宙は意の望みし所に非ざれば、欣躍すること特に甚だし。遂に倩娘を船に匿し、連夜遁れ去る。道を倍し行を兼ね、数月にして蜀に至る。<sup>(注18)</sup>

「君の厚意」、「君の深情」に應えて女は魂として旅に出た男を追いかけて来たのであり、また男に應える思いを伝えている。

このように「長恨歌」・「長恨伝」や「離魂記」では、男の愛情の深さに、幽冥境を異にしながらも女の魂がそれに応え、或は身から脱け出た魂となつて応えている。生霊の出現もある意味では現実世界とは次元を異にする世界からの来訪者という面もあるであろう。源氏が生霊と対面する場面は、方士が楊貴妃の魂と対面する場面の翻案とも考えられる。葵巻では、女的身

の嘆きから魂が抜け出て生霊となるが、かえって男から疎まれるのである。中でも「長恨歌」の詩句に歌を合わせて葵上を偲ぶ源氏の心情を表わすところで引かれているので、その逆の構成になっていると考えられる。

## 終 わ り に

葵卷の生霊の歌は、「したがひのつま」を結んで魂を結びとどめてくれと言っているだけでなく、暗に源氏を「つま(夫)」として呼びかけている。『源氏物語』の歌を検討してみると、直接には「したがひのつま」に言い掛けたとしか取れないものである。そこには一貫して源氏の愛情と、公然とした妻としての処遇を求める六条御息所の思いが反映されている。しかし、源氏は、御息所が物の怪の正体と知って疎ましく思うばかりであり、ふたりの仲はそのため隔たってしまう。それは「長恨歌」・「長恨伝」や「離魂記」のように魂となっても愛情を全うする物語とは逆の設定になっている。特に「長恨歌」は葵卷にも引かれているので、それと異なる現実世界の生霊の物語を構成したと考えられる。御息所の生霊は、『源氏物語』の女君の中で最も本質的に妻としての処遇を求める女の化身と考えられる。

(注1) 『源氏物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)

により、冊数と頁数を示す。以下同じ。

(注2) 伊井春樹編『源氏物語古注集成8』五〇頁 『孟津抄』(野村精一編『源氏物語古注集成4』) もほぼ同じ。

(注3) 井爪康之編『源氏物語古注集成9』一〇八頁

(注4) 多く「山がつの家の垣根は荒れていても、何かの折々にはお情けの露をかけてくだいませ、その垣根に咲くまでしこの上に」(新全集) のように取られているが、「山人の家の垣根が荒れるとしても、折々に情けの滴を子のうえにかけてくれ、撫子の花の露よ」(新大系) とするのがよいと考えられる。

(注5) 新全集頭注

(注6) 『伊勢物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集による。二〇八頁

(注7) 御息所の生霊の歌と、密通後の柏木の精神状態を叙したこの部分との関係については、久富木原玲著『源氏物語 歌と呪性』(若草書房 一九九七年十月) 参照。一九八頁

(注8) 玉上琢彌編『紫明抄河海抄』四九五頁

(注9) 『蜻蛉日記』の引用は、新編日本古典文学全集による。三四二頁

(注10) 植原茂子「六条御息所」(『物語を織りなす人々 源氏物語講座2』平成三年九月 勉誠社) には、「六条の女性の物怪とは常に自尊心を傷付けられる事への憤りや恨みによる執の現れであった。種々の形をとってはいても、結局は源氏に大切に扱われなかった事によって受ける屈辱感に起因していた。」とある(二〇九頁)。

(注11) 浮舟の場合は、「右近、ほど近く臥すとして、「かくのみのを思はせば、もの思ふ人の魂はあくがるものなれば、夢も騒がしきならむかし。いづ方と思しさだまりて、いかにもいかにもおはしまさなむ」とうち嘆く」(浮舟6・一九六〇七) と、「もの思ふ」ことによって浮舟の魂が身から離れ、その結果として母の

夢が騒がしいのである。

(注12) 高橋和夫「源氏物語・六条御息所論の問題点」(群馬女子短期

大学国文研究第二十二号 平成七年三月)には、「いくら髪を洗っても着替えても同じようだというのは、この御息所の髪と着衣が、何らかの方法で葵上の室内に行つて、芥子の香にしみているのではなくて、御息所が、葵上の身体を占有しているのだから、その身体にまといわっている髪と衣服をいくら洗い、取換えても、もとの葵上の髪と着衣はそのままなのだから、芥子の香もそのままなのである、こう説明することができる」とある。そうであれば生霊が葵上の口を借りて源氏にものを言う場面とより繋がりが深いことになる。

(注13) 森 一郎「六条御息所の造形——その役割と問題——」(『源氏

物語作中人物論』昭和五十四年十二月 笠間書院)には、「生・死両霊ともに、人より貶されることに深い恨みをもつところに六条御息所のものけ出現の契機があることが知られるが、死霊の方により深いものがあることが知られる。」(七十二頁)とある。

(注14) 『夜の寝覚』の引用は、新編日本古典文学全集により、巻数と頁数を示す。

(注15) 拙稿「葵巻の『長恨歌』と和歌——葵上・六条御息所と『長恨』——」(『広島女学院大学日本文学』第十二号 平成十四年七月)

(注16) 「長恨歌」の引用は、『新編日本古典文学全集源氏物語1』による。

(注17) 「長恨伝」の引用は、『新釈漢文大系 唐代伝奇』による。

(注18) 「離魂記」の引用は、注17の書に同じ。

## The meaning of “musubi-todomeyo shitagahi no tsuma”

Toshiaki FUJIKOUGE

**Abstract**

“WAKA”, the poem, by the spirit of Rokujo no Miyasudokoro in the Aoi chapter means that she not only pleads to bind her spirit to “shitagahi no tsuma”(The kimono hem), but also call Genji as “tsuma”(husband). Considering poems in The tale of Genji, she just pleads directly with “shitagahi no tsuma”. This poem shows Rokujo no Miyasudokoro’s consistent love for Genji and her desire for being his wedded wife. Genji, however, felt annoying when he found out she was the identity of the spirit, and a real distance between them was glowing.

On the one hand, “Chougonka”, “Chougonden” and “Rikonki” in the Tou Period depict the stories of consistent love in the soul’s world, which is different from the tale of Genji. In particular, as “Chougonka” is excerpted in the Aoi chapter, which means that the author depicted the spirit in the real world, different from that of “Chougonka”.

The spirit of Miyasudokoro is the incarnation of women of “The tale of Genji” who seek Genji’s wifehood in a very real sense.